知識社会学から知識の実践学へ

From a Sociology of Knowledge to a Praxiology of Knowledge

中 村 和 生
Nakamura Kazuo

This paper tries to demonstrate that relativism, scepticism, and anti-realism that the Sociology of (Scientific) Knowledge inevitably assumes are logically difficult and not useful for empirical investigations. First, by way of *Reductio ad absurdum*, the Reflexive Programme is examined. Next, a relativist-sceptist orientation is grasped in the empirical studies of Sociology of Scientific Knowledge. This orientation is criticized from the standpoint of ethnomethodological studies of scientific work. A Praxiology of knowledge is proposed.

1. はじめに

知識社会学の営みを一言でまとめるなら、知識（生成）の社会的条件の研究ということになろう⁽¹⁾。しかし、その知識社会学も、当初、数学や自然科学を研究対象から除外する方針を採ってきた。マンハイムは知識の存在被拘束性の適用可能な思考領域を、「内在的な発展法則」や「純粹に論理的な可能性」ではなく、「存在条件」と言える諸々の「理論外的条件」によって決定される領域としたからである [Mannheim 1929=1975:298]。科学哲学からも、科学の心理・社会的研究に残されているのは、理論外の誤りなどの二次的な問題だけであると論じられることもあった [Lakatos 1978=1986:174]。

科学的知識の社会学の創始者、D.ブルアは、このように除外されてしまった領域への社会学の介入を理論的に根拠づけた。マンハイムが抱えた、数学や自然科学をめぐる知識社会学の困難は、懷疑主義的なウィトゲンシュタイン解釈によって克服できるとブルアは論じる [Bloor 1973]。ブルアは、デュエム・クワインの「決定不全性のテーゼ」やハンソンの「理論負荷性」にそって、数学の公理でさえもそれじたいの観点からだけでは従うことができないこと [Bloor 1983:chap.5] や、(ラボアジェの酸素発見によって覆されることとなった) プリーストリーが支持したフロギストン説も、ある目的からすれば実在との満足な対応を成し遂げていること [Bloor 1976=1985: 50-4,197-9] など主張していく。

このように、通常は客観的実在との精密な対応を根拠にして確立されたとみなされる自然科学や、論理一貫性が必然とされる数学でさえも、文化的産物としての相対性の余地を少なからず残していることを示すことによって、真偽に拘束されることなく科学的知識の社会的条件を指摘し、因果的説明を行っていくことの可能性が説かれていく。科学における真偽を決定するのは、科学それじたいではなく、その当の科学とは切り離して考えるべきものとしての社会的なるものだということになる。

これにより知識社会学は新たな対象領域として「科学の実質的内容」を手にした。しかし、マンハイムへの揶揄 [Bloor 1973:179] にもかかわらず、その新たな領域へのアプロ

ーチの方法は決して変わっていない。科学的知識をその社会的条件から説明していくという試みは、「内在的な発展法則」や「純粋に論理的な可能性」ではなく、「存在条件」や「理論外的条件」による思考領域の成立を明らかにしていくことに他ならないからである。

本稿は「科学の実質的内容」を対象化したことに、この知識社会学的態度の意義を認めながらも、この態度では結局は当の対象を歪めてしまう必然性があることを示し、これにかわる方法的態度として、科学のエスノメソドロロジー研究にもとづく知識の実践学を提唱したい。本稿では、対象を歪めてしまうこの必然性は知識社会学に備わる相対主義や懷疑主義、さらには反実在論(anti-realism)に由来するとみなす。そして、こうした主義(-ism)が論理的に困難なものであり、社会学の経験的研究一般にとっても益するところが少ないことを示したい。

まず、知識社会学的手法の自己適用を一貫して進めた再帰的(reflexive)プログラムを、背理法的手順をとって検討し、知識社会学に備わる根本的前提の誤謬を示す。次に、その前提とみなされる相対主義的・懷疑主義的志向を科学的知識の社会学の経験的研究の中に読みとる。その上で、それらの志向を科学のエスノメソドロロジー研究にもとづき批判する。そして最後に、知識社会学によらない方法的態度として知識の実践学を提唱したい。

2. 再帰的プログラムのラディカルな展開

ブルアが自らのストロング・プログラムを提唱するにあたって、「因果性・不偏性・対称性・再帰性」という四つの原理を定式化したのは有名である[Bloor 1976=1985:7]。そして、このプログラムの経験的研究においては、研究対象を「科学者集団」の「利害関心」から準因果的に説明するという手法がとられた。この手法は、S.ウルガーによって、当の原理の一つたる「再帰性」の観点から批判されることになる。

ウルガーは、自らの方針が「不偏性」の原理にもしたがったものであることを強調しながら[Woolgar 1981b:511-512]、この説明手法の特性を分析し[Woolgar 1981a:388-389]、さらには「再帰性」が招来する無限後退を避けたことに関してブルアを直接批判する[Woolgar 1983:255]。こうした展開をとおして、ウルガーは、四つの原理の中で特に「因果性」から距離をとり「再帰性」を全面的に展開することによって、「不偏性」や「対称性」を「被研究対象の実践」と「研究実践」との関係に適用したプログラムを切り開いた。本節では、このプログラムの内実とその狙いを確認しておきたい。

この再帰的探求の典型例として挙げることができるのは、アシュモアによる事例研究[Ashmore 1988:chap.4]である。その研究では、科学的知識の社会学における経験的相対主義プログラムの創始者H.コリンズの主張が再帰的に検討される。コリンズは、自然科学における実験の反復可能性は解釈や交渉に依存するという知見を提出するが[Collins 1974]、この知見じたいは経験的相対主義者によって反復可能であり、そう要求すべきだと主張する[Collins 1983:92-3]。つまり、自然科学においては文字どおりに捉えることのできない反復可能性が科学的知識の社会学においては成し遂げられるというのである。

アシュモアは、ウルガーの着目点にそって、コリンズの知見の反復可能性を検討している。さしあたり、ここで注目したいのはその検討の内実ではなく形式である。アシュモアは、コリンズの諸著作、インタビュー、手紙などを用いて、コリンズとの実際の対話や想像上の対話を自らのテキスト内にちりばめる。想像上の対話も、時系列にそった会話を創

りだす場合もあれば、(同時発話の目論見とともとれるように) 頁の両端に対話を並べる場合もある。反復可能性の検討は6段階に区別してなされるが、そのあいだに、コリンズの知見の支持者と反対者の想像上の対話も挿入される。そして、各段階の検討が終了すると、この自らの試み自体がコリンズの主張(知見の反復可能性)の候補になっているのかどうかを、自らが用いた同じ6段階の検討基準から考察している。さらには、最後も、反復可能性の検討の結論が各段階から明らかであるのに、それを定式化するのではなく、自らの分析結果に関するコリンズとの終りなき対話を創作することで締めくくられる。

またウルガーは、自らが編じた論文集において、その全ての論文の終りに省察(reflexion)を加えるという著述形式をとっている [Woolgar 1988a]。これは、論文編集者たるウルガーによって全て書かれているものの、この論文集の一貫性や連続性を主張するために設けられたわけではない。むしろ逆である。それは各論文の著者の主張と混ざりあいつつ、各テキストから発せられる声の多様性を強調するためになされているのである [ibid.:12]。

このようにして再帰的な態度を表明する著述形式は他にも多数ある⁽²⁾。ウルガーは、こうした試みを、社会科学が自明視するとされる「表象のイデオロギー」[Woolgar 1988b: chap.7] というものに反対するための一つの方策と位置づける。この「イデオロギー」とは、研究対象がどんなものであれ、それがその表象に先行するという、いわば科学一般を越えて自明視されている実在論的志向である。そして、この「イデオロギー」が、自らも含めた社会構成主義者の相対化実践にも関わらざるをえないとウルガーはみなす。つまり、「事実というものは先行的には存在しないが、構成作業によって構成される」と主張し、その構成作業を記述するのなら、そうした記述に先行して構成作業が存在したという、「表象主義的」コミットメントをすることになるからである。

これは相対主義のアポリアとしてしばしば指摘されてきたものに等しい。再帰的プログラムは、このような奇妙な著述形式を多様にとることによって、なんとかしてこの「イデオロギー」から逃れようとする。よって、再帰的プログラムとは、少なくとも二つの意味においてラディカルであろう。まず、自らの主張の相対化を、その当の主張と同時にこなう意味において。次に、自己分析によって自らの実践を危ういものとし、それに対する終りなき議論や無限後退を招来するという意味において、ラディカルである。

3. 科学的知識の社会学と相対主義・懐疑主義・反実在論

以上のようなリフレキシヴ・プログラムが、マートンのように方法論的自己実現として再帰性を掲げる合理主義的志向 [Merton 1978] への緩和策となることは確かである。しかし、この意義を認めつつも、ウルガーのリフレキシヴ・プログラムに見られるような新たな著述形式を採用することは、それでも奇妙であることは否めない。

この奇妙な著述形式の採用はもちろん偶然ではない。むしろ、最初的前提こそがあの著述形式を導いたのではないか。その前提は、あるやり方では説得力を持って利用されたがために、前提としての負荷の重みが認識されなかった。むしろ、こうした奇妙さを導いたことによってその問題が極まったと言えるのではないだろうか。その前提は他ならぬ知識社会学に内在するものと考えられる。

そもそも知識社会学的態度には、研究対象の真理値を否定するという方向性があった。たしかにマンハイムは相関主義が相対主義ではないことを強調している [Mannheim 1929]

=1976:59]。しかし、知識の社会的条件の指摘が必然的に相対主義を導くと考えられるからこそ、それを克服するために相関主義が必要であることを強調せねばならなかったと推考してよいだろう。もちろん、マンハイム自身は「 $2 \times 2 = 4$ という言明は、この言明が誰によって、いつ、どこで、そのように定式化されたのかということを考えるわけにはいかない」[Mannheim 1929=1975:305] と述べており、数学や自然科学に対する懐疑主義をとったとはされない^③。しかし、数学すらその社会的条件からの説明に服するとブルアが主張した際には、規則に従うことに関する懐疑主義が不可欠であった。よって、知識社会学的態度においては、研究対象が真理値に関わるものであればあるだけ、相対主義は懐疑主義、さらには反実在論と結びつく。こうした主義を自己の研究プログラムにまで適用したのが再帰的プログラムである。したがって、このプログラムの根幹にこれらの主義がある。以下では、こうした主義がいかに知識社会学的説明の拠り所やインパクトになっているのかを確認したい。そのために、科学的知識の社会学の典型的な経験的研究を二つ取りあげたい。

最初に取りあげたいのは、H.コリンズの方法論的主張と経験的研究である。ストロング・プログラムと多くを共有する科学的知識の社会学者であるコリンズは、そのプログラムの原則の中で、「不偏性」と「対称性」をラディカルなものとして強調し[Collins 1983:87]、その立場から、脈動星（パルサー）発見の瞬間の天文学者の相互行為を分析したガーフィンケルたちの論文[Garfinkel, et al 1981]（以下、「パルサー論文」と略記）を批判している。

コリンズの批判の中で最も重要なのは「ある科学者のワークの何によって、彼らが偉大な発見をしていることになるのかを知るには、そのワークの場面以外を見る必要がある」[Collins 1983:105] という主張である。コリンズは「発見」として報告された事態が後に間違いとされる場合などを指摘しながら、発見の手続きやその証拠についての知識を手にして録音テープから「発見」の瞬間の局所的歴史性をどんなに詳細に研究しても、歴史的出来事としての発見には決して到達しないと主張する。

これに関連して、録音テープを主たる研究素材として用いることも批判されている。その録音テープは断片的で短く、発見の詳細を定める上でも情報が不足しており、ましてやガーフィンケルたちは「その場」にいなかったわけであるから、テープの存在をもって特権的な立場を主張することはあってはならないし、この類の事柄ならインタビューなどでも同様に入手可能であるから、こういった物神崇拜的アプローチは慎むべきである、というかなり辛辣な批判が繰り返されている[ibid.:110]。

こうした批判は、何が科学的発見を決定しているのかという問いを自然科学の基準から切り離してたてることに躊躇しないなら、なにもコリンズ特有のものではない。数学や自然科学を説明しようとする極めて多くの人文・社会学者なら、通常同じ考えに至るだろう。社会学的な説明を好むコリンズは、天文学の「共同体」の「合意」の形成過程を研究する方が有意義であることを示唆している。

実際コリンズの経験的研究の中には、そのような「合意」形成に注目して、そこから社会学的説明概念を抽出しているものがある。たとえば、彼の「TEA レーザー」の研究においてもそのことが示唆されている[Collins 1974]。その研究によると、新種のレーザーが北米で発明されたという報告を知ったイギリスの実験物理学者たちは、このレーザーを

自分の実験室で作りあげることに取りかかったのであるが、文献上に報告された技術的知識だけではその製造は不可能だった。そこで、各々の実験室は、発明が行われた実験室と何らかのコンタクトを取ることで製造を成功させようとしていった。

この事例は、製造された個々のレーザーのどれが、まさに本物のレーザーとして是認されるのかは「有力な判定者」によっていたという指摘のゆえに注目された [Mulkay 1979=1985:164]。コリンズによれば、製造の成功を競い合っていた各々の実験室は情報提供その他の協力を差し控えていたが、たった一つの実験室だけが、北米との関わりを含めて、各実験室の進行状況などの情報を他の実験室に提供していたのである。

この点からコリンズは、その実験室が、たんに製造上の観点から優勢であるばかりでなく「その威信(prestige)はイギリスの諸大学（の実験室）から傷つけられることが全くないように思われる」[Collins 1974:180-1]と推論する。つまり、この威信ゆえに、その実験室は他の各々の実験室に対して支配的な力を保持しているという説明が可能になるのである。この事例から「有力な判定者」というカテゴリーをくくりだし、判定の技術的基準とは区別される「社会的」基準を提出し、それを説明項として強調することが、彼らの研究が他ならぬ知識社会学であるということをあからさまにしている⁽⁴⁾。

そして、この判定の「社会的」基準の強調の中に技術的基準に対する相対主義的・懐疑主義的志向が見うけられる。コリンズの強調点をくみとるなら、技術的基準によってはどれも「本物のレーザー」にはなれないし、また同時にどれでもなる資格を持っていると容易に読めてしまうからである。こうした観点から、ガーフィンケルたちの研究においてはそのような説明が「抜け落ちている」というような非難がなされているのである。

次に、実験室研究の記念碑的著作たる『実験室生活』[Latour & Woolgar 1979]を取りあげたい。そして特に彼らの方法論的前提に注目しながら、それによって生み出される懐疑主義的志向、更にそこから引き出される反実在論的読解を確認しておきたい。

B.ラトゥール&S.ウルガーは、A.シュッツやG.ジンメルの議論と同様に、観察者が「他者者」であることが観察対象の把握にとってむしろ利点であると主張する⁽⁵⁾。彼らは様々な観察記録をとおして、およそ実験室にあるものはすべて「インスクリプション」として元々の実体と直接の関係を持ち [Latour & Woolgar 1979:51]、実験室の内部構造じたいも多く図やダイグラムを含んだ論文を産出していくように組織されていると主張する。

ここで彼らが強調するのは、その組織化のあり様じたいがいかに秩序だったものであるのかということではなく、むしろそれとは反対に、実験室とは通常「無秩序な」ものであり、その無秩序状態は、インスクリプション装置によってテキストのレベルへと改変されることで始めて秩序だったものになるということであった [ibid.:27-36, 252-8]。

このようにして実験室を無秩序とみなしたことの損失はかなり大きいものであったが⁽⁶⁾、本稿で注目したいのは実験室を無秩序とした際の彼らの方法論的前提である。それらは、この著作の序論と結論にある。結論では、J.マクスウェルの逸話やボード・ゲームを用いて実験室の無秩序性が比喩的に語られるが、序論では、ウルガーの研究事例である脈動星発見に関する記述 [Woolgar 1976] を例として無秩序性が論じられている点が興味深い。その議論では、脈動星発見に関する記述が賞賛とも非難ともとれることから、記述はどのようにでも解釈することができ、さらには「原理的には、どの代替案も疑うことができる」[Latour & Woolgar 1979:35]ということが強調されているのである。

こうした解釈の無限性が相対主義にもとづくものであるのは明らかであるが、ブルアの議論と同様、自然科学のように発見の真理性に重きを置く領域の分析において解釈の無限性が強調されるのであれば、それは発見への懐疑主義的な態度であり、さらには発見された対象に対する反実在論とも結合すると理解されるのは当然であるかもしれない。

『実験室生活』の反実在論的な読解が可能な箇所として最も有名なのは、彼らの観察対象たる自然科学者の発見物であるTRF（甲状腺刺激ホルモン放出因子）が「徹頭徹尾社会的構成物である」[ibid.:152] という主張である。この主張を「人工的なリアリティというもの、実験の参与者によっては客観的実体という観点から記述されるけれども、実際にはインスクリプション装置の使用によって構成されたのである。」[ibid.:64] という主張とあわせて考えれば、きわめて反実在論的な主張となる。I.ハッキングは、この文の「人工的(artificial)」と「客観的」が対立項として表現されているととれる点ではラトゥール&ウルガーは科学的実在論に反対する論者であると述べている [Hacking 1988:285]。「構成」という語も、こうした文脈では「実在」との対比で理解されても仕方ない。もちろん、『実験室生活』の内実をその方法論によってだけ判断するのは公平でないが、彼らの全体的な論調が相対主義や懐疑主義、さらには反実在論までも寄せつけるものであるのは否めない。そして「最初の実験室研究」として出版された本において反実在論ともとれる議論が展開されたことがいかにインパクトを持ったのかを想像するのは容易い⁽⁷⁾。

4. 科学実践内現象としての懐疑的態度

本節では、「パルサー論文」へのコリンズの批判に対するM.リンチの再批判 [Lynch 1992:247-256] を参照して、相対主義／懐疑主義に対する批判を展開していく。第一に、コリンズの批判を再検討し、相対主義や懐疑主義が、科学的知識の社会学が事例研究を行っていくに際して論理的な誤謬を犯していることを論じる。第二に、脈動星発見の論文にたち返り、懐疑的態度の位置づけをする。この懐疑主義的志向は社会学者が拠り所とするものではなく、実験実践を構成する一つのリソースにすぎないことを示す。

(1) 懐疑主義的議論のトリック

まず、コリンズのガーフィンケル批判から考えたい。発見とされてきたことが後になって否定されるという想定には、ストロング・プログラムと同様の懐疑主義的な志向が既にある。算術の規則があるだけではその規則に従うことができない、という見解から引き出されたのは、数学それじたいとは別の観点、すなわち共同体の「抑制」「合意」といった説明要因である [Bloor 1983=1988:138-9]。しかし、そのために、規則の定式と規則に従う活動の内的な関係 [Sharrock & Button 2000] が切り離されたのである。

この規則の議論と同様の展開をみせている点で、コリンズは、ブルアと同様に、発見に関して懐疑主義的議論を引き寄せている。また、算術の規則よりも発見の方が「共同体の合意」をより実体的なレベルで想像しやすいので、そこから説明概念を引き出すのも容易である。リンチは、発見された対象とそれを発見たらしめている一連の行為との内的関係を切り離す点では、実在論者も懐疑主義者も変わらないが、発見の行為の表象として書かれた報告が発見された対象を構築するのだという懐疑主義的主張によって、実在論者の議論は反転させられる、と指摘する [Lynch 1992:251]。つまり、規則の「言明」ではその

馴染みの規則に従う活動を決定できないという議論と同様に、脱状況化された「報告」のどれが発見された対象の報告であるかを決定できるのは、発見活動以外の何かでなければならないということになってしまう。これを所与とするのなら、発見「報告」の是非は、天文学の「共同体」による、天文学的基準と切り離された「社会的」基準によって決定されるという反常識的な主張がいとたやすく帰結するのである。

リンチが主張するように [ibid.:253]、そのような「社会的」基準から天文学の「共同体」が発見の「報告」を「承認」するまで、どんな天文学者も発見を行うことができない、というコリンズの主張はトリックである。コリンズやブルアの好む「共同体」のアナロジーを続けてみれば、このことは一層明らかになる。まず、天文学の「共同体」が判断するのは発見の「報告」だけではない。発見の同定をめぐっては、発見手続きそのものが全て考察対象となる。発見の是非に必要なのはその手続きの遂行や理解可能性である。つまり、「共同体」が判断を下す審議室は観測室でもなければならない。次に、その審議には判決を下す裁判官は存在せず、存在するのは陪審員による審議だけである。よって、論理的には、天文学的基準ならざる「社会的」基準から「共同体」の「権威者」が介入する余地はない。このことは経験的事実によっては覆されえない。つまり、そうした事実があるなら、それは天文学的基準が順守されなかったことを示すにすぎないのである。

もちろん、それでも「共同体」のアナロジーを維持することは可能である。しかし、「共同体」の判断は、もはや諸成員の天文学的行動と切り離すことはできない以上、誤解を招くものでしかない。知識社会学に由来する相対主義を一貫して行使し、行為の「説明要因」を社会学特有のものとして構築するために、コリンズたちはこのトリックをどうしても必要としたのである。しかし、ガーフィンケルらの研究によるトランスクリプトを丹念に追っていき、彼らの議論を検討するなら、実験室の活動による発見の同定作業の実際は、そのような知識社会学的説明に耐えうるほど従順なものではない。

(2)「バルサー論文」再考

脈動星発見の瞬間を取りあげたガーフィンケルたちの狙いは何だったのか。懐疑主義の誤謬から考えていきたい。規則の定式に適切な意味が与えられるのは、そのルールに従って実際に活動を行うことにおいてである。全く同様に、発見の報告論文は、その報告が定式化している実際の活動の秩序に携わることにあって、はじめて適切な意味を持つ。ブルアやコリンズのように、定式や報告を、それを用いる活動と切り離すことは、丹念に培われた樹木をわざわざ根こそぎ掘り起こし、枯らせるようなものである。

つまり、ある発見を説明する要因がかりに必要とされるとしても、それは、相対主義に由来する社会学的説明要因ではなく、発見手続きにそった対象への介入過程の中に求められなければならない。社会学が説明を行うという実践を行う以前に、そしてそれとは全く別に、発見は既に達成されている。もちろん、発見それ自体に関して社会学が行うことはそれでも残っている。それは、科学者自身が同僚なら誰にでもわかるように、自分が行ったことが発見なのだということを、まさにその発見のただなかで理解し、理解させていくことを記述し、その特性を分析することである。

実際ガーフィンケルたちは、そのような記述・分析を試みたのである。観察の初期において、スクリーン画像上のパルスに関して取り交わされている天文学者たちの会話を見て

わかるのは、一方の天文学者はその当初から「それ」がパルサーであると確信して興奮しているが、もう一方の天文学者はそれに「懐疑的な」応答をする。たとえば、発見を確信している天文学者がチーフに発見を電話で伝えることを促した後も、懐疑的な天文学者は、器具の調整を頼んで、「それ」が人工物でないかと再三にわたり疑っているのである⁽⁸⁾。発見の真理性をめぐる疑問は哲学者や社会学者が自由に操れるものではない。それはその晩にその場で発見作業に携わる自然科学者の、その都度進行していく一連のやりとりの中で提出され、そして受け入れられたり、拒否されたり、留保されたする事柄なのである。つまり、一連のやりとりの中で使用されていく懐疑に他ならない。

その数回の確認後に懐疑を示していた者も確信にいたるが、発見作業はまだ終了しない。発見の報告を何時すべきなのか、どのように呈示すれば、単なる「確信」でなく「発見」として是認されるのか。これらの課題を克服していくために、その後の入念な作業がテープが終了しても続いていることは当然想定できる。発見とは、この局所的な歴史性の全てにおいて、その全てから成るものとして、発見者がそこでの過去を振り返り、未来を予期しながら達成されていくものなのだという事柄、ガーフィンケルたちは主張している。

たしかに、この局所的歴史性すべてを入手できるのは実践者において他にはない。ガーフィンケルたちはその実践活動の一端を提示しているにすぎない。しかし、この局所的歴史性は決して無視できない。というのも、このような局所実践がこの一端に限らず行われているのは疑いえないことであるし、この局所実践なくして発見は成立しえないからである。たしかに発見というものは「報告」にまとめることが可能な事柄であるが、その「発見」をまさに発見にしているのは局所的な実践活動であり、その秩序なのである。これらがインタビューによって入手可能である保証はどこにもない。

ラトゥール&ウルガーとは反対に [Latour & Woolgar 1979:244-252]、こうしてガーフィンケルたちが見出したのは、観測室における活動が秩序だっていることであり、そしてこの秩序性は終わりなき日常性におけるものに他ならないということであった。そのトランスクリプトには、「雄叫び」が何回もなされていたり、いくつもの「それ」が発されている。こういった感嘆詞や指標的表現が「無秩序」となるのは、それらが「科学的合理性」という理念にもとづく科学活動と対照させられる場合において他にはない。もちろん天文学者たちは、諸々のインスクリプションによって手にした結果を「発見の告知」や「論文」にしていく活動に従事していく。しかしながら、そうした活動ですら、観測室の秩序だった実践があればこそ、それに引き続いて行うことができるのである。

よって、科学者たちの実践というものは殊更に疑われる余地のないものである。ましてや、他所者によって相対化されたり無秩序にされたりして、懐疑に服するような現象ではない。そしてガーフィンケルが掲げたトランスクリプトからわかるのは、観測の過程において、何かが疑わしいという事態が訪れるということである。そして、この事例とは異なっていて、そうした懐疑が、一日の作業のやり直しから、調査研究プログラムじたいの頓挫にいたるまで、実践上の重大な帰結をもたらすこともあるだろう。

しかし、こうした懐疑を契機とする様々な失敗は、科学実践一般が科学哲学者や科学社会学者によって予め全面的な懐疑を受ける対象となることには決してならない。むしろ、懐疑的態度というものを科学実践の中に返してやることを納得させてくれる。同僚の主張を批判してみたり、観測結果を疑ったり、そして時には、科学的対象の表象が実在を反映

しているものではないとして観測や実験をすべてやり直すという作業において、懐疑的態度は見てとれるのである。それは、科学的対象を精密に厳格に探求していくという科学実践の中において使われる一つのリソースにすぎない⁽⁹⁾。

そして、科学的対象の探求があくまで實在論的志向に根差したものである以上、實在論的志向も懐疑的態度も、科学実践にとって不可欠の両輪なのである。これらは社会学者によって「イデオロギー」として斥けられるものではなく、一連の実践活動の中において、状況に応じて採られていき、そのようなものとして観察可能な事柄なのである⁽¹⁰⁾。

5. 知識社会学から知識の実践学へ

最後に、こうしたガーフィンケルたちの探究が知識の社会的研究として持つ方向性を、若干ながら描いておきたい。この研究は、知識の社会的基盤を指摘することで、その知識の真理値を格下げすることに反対する。前述したように、ガーフィンケルたちは発見を可能にしている社会的条件を提出しようとはまるで考えない。彼らの問いは「その晩の天文学者のワークとしてパルサーは何から成るのか」[Garfinkel, et al. 1981:132]であった。つまり、この問いを真剣に考えるのなら、発見活動における、そしてその活動そのものから成るものとして、発見はいかにして達成されているのか、というものになる。よって、社会的条件の真实性を必ずしも拒絶するわけではないけれども、それらの列举に終始しては、発見活動じたいが持っているこうした社会性が失われてしまうことが理解できる。

この発見活動じたいの社会性を明確にするために、コリンズ自身の研究に立ち返りたい。その研究ではレーザーの製造の成功の是非に関して「有力な判定者」の存在が強調されていたが、そればかりでなく製造にあたって「直接の個人的接触」[Mulkey ibid.:161]が果たす役割も主張された。さらにコリンズは、公表された技術的知識の不十分さは暗黙の知識が把握されていたかどうかの原因となっていることを述べている [Collins 1974:177]。

ここで注目すべきなのは、そのような知識を社会的ならざる、もう一つの基盤として定式化していく必要があるということではない。それでは、社会的条件からの疑似因果的説明とさして異なるところはない。むしろ、公表された技術的知識も暗黙の知識も、それがあつて使用されていく、その成り立ちと切り離して考えることはできないことに注目すべきである。すると、レーザーを製造するという活動における秩序性に注目することになり、コリンズのこの研究にガーフィンケルらの研究との接点を見出す可能性が開ける。

それゆえ、レーザーを製造するという活動を、その製造者の役割を強調するあまりに「個人的性格」を有するものとしてコリンズが表現したのは誤解を招きやすい。レーザーを製造するという活動は、数人で行われようとも個人によって行われようとも、他人に入手不可能な現象ではない。もしそうであるのなら、その製造についてのあらゆる議論はほとんど意味をなさない。強固な主観性も同じく拒否されるべきである。私的言語の不可能性と同様に、この活動も公的な観察・理解可能性を備えており、その意味で社会的なのである。

そして、こうした社会性、発見活動の秩序性の公的な観察・理解可能性への注目こそがガーフィンケルが提唱するエスノメソドロジー研究の独特さなのである。実践活動それ自体の理解可能性を社会的なものとしなすガーフィンケルらの論点は、知識社会学に由来する社会的条件の指摘とは根本的に袂を分かつ。つまり、実践における調和を共同体の合意

その他の条件にすりかえることによって社会学特有の説明要因を築いていく知識社会学の主張とは完全にすれ違っているのである。

ガーフィンケルらの論点からすれば、実験室内の活動に注目するのであれ、実験室外の科学的営為に注目するのであれ、従来の社会学が築きたいような疑似因果関係を成り立たしめる社会的要因がそうした実践活動の詳細のレリヴァンスに入り込む余地など、ほとんどない。さらには、そうした社会的条件を指摘することを可能ならしめる全面的な相対主義や懐疑主義を採るのであれば、逆に、当の対象を歪めることになるのである。そして、これらのことを把握することこそが、実際の活動の秩序性の観察・理解可能性が問うに値する一級の社会現象なのだということを知識社会学に気づかせてくれるのである。

この理解可能性の探究を「知識の実践学」と呼べると思う。それは、第一に、知識の社会的基盤を指摘するのではなく、知識それ自体を社会的なものとしみなす点で知識社会学と大きく異なる。そして第二に、その知識を、知識内容としてだけでなく、知識産出のあり様やその公的な観察・理解可能性として捉えている点でも知識社会学と大きく異なる。

この第二の点は、ガーフィンケルたちが天文学に習熟していないにもかかわらず、断片的で短く、情報の不十分な「テープ」から聞き取れることによって知識産出のあり様を分析したという事実にもよく現れている⁽¹¹⁾。もちろん、テープが録れば、それが完璧なデータとなるわけではない。それは社会科学者の単なる手段であり、データというよりは断片である。また、扱いたい現象や問題関心に応じて、テープの地位も様々であろう。

しかし、我々の社会は、もっぱらその断片において、そしてその断片から成るものとして、その都度その都度、瞬時の連なりをとおして達成されている。このことは発見テープのトランスクリプトからでも理解できるし、これこそが実際の活動の秩序性の観察・理解可能性の一端そのものである。そのようなその都度の達成と、それについてのインタビューを等価とし、この達成を離れるのなら、この知識産出のあり様は、観察可能なものであり公的に理解可能であるにもかかわらず、消え失せてしまうのである。

この知識の実践学的態度は現在の社会学的方法の模索〔内田 2000〕にたいする一つの答えになっているのではないだろうか。科学的知識の社会学は、社会学をする際の「基礎づけ」の方向性を、再帰的な自己適用によって打破した。この意義を認めつつ、知識の実践学は、相対主義・懐疑主義の論理的誤謬を示すことによって、終わりなき「再帰性」の方向性をその根源から断ち切る。「基礎づけ」も過度の「再帰性」もそもそも不要であり、さしあたり様々な場における実際の活動の秩序性の常識的な観察・理解可能性を出発点とする研究の道がすでに開かれているのである⁽¹²⁾。

注

- (1) 本稿においては、知識社会学を特にマンハイムによる定式〔Mannheim 1929〕から捉えたい。よって、P. バーガー&T.ルックマンによって大幅な修正を施された再定式は、論点がばやけるので考察対象外とする。
- (2) 〔澤井 1995〕参照。アシュモアは同じ著作の中でパラレル・テキストという形式も用いている〔Ashmore 1988:chap.6〕。これは一つのテキストの中で二人の著者が同時に議論を展開するものであり、一方の著者の節が終るともう一方の著者の節が介入してくる。第二の著者は第一の著者の直前の主張を支持したり批判したりする。第二のテキストは、言わばメタ・テキストとして働いている。しかし、メタ・テキストがテキストを支配するわけではない。最後には、両著者の最終同意なき対話が

おかれ、この章は幕を閉じる。

- (3) この点の詳細な検討としては [Lynch 1993:41-54] を挙げることができる。
- (4) ただし、そのような判定者や一般基準がないとする事例もコリンズは論じている。この点において、コリンズは、ブルアと同種の社会学主義を採りながらも、研究の方向性を若干であるが異なるものに行っているように思われる。そのような研究として、たとえば、[Collins & Pinch 1978] を挙げることができる。
- (5) この主張はかなり疑わしい。彼らは「人類学的に奇妙な」ものとして対象を見るという、もともとガーフィンケルが用いた表現を用いて自らの利点を保証しようとしている。しかし、ガーフィンケルは「他所者」というアイデアを、未知の現象の解明に携わる「研究者」の方法論上の利点でなく、既知の現象の解明のための助力として用いて様々な期待破棄実験を行ったのである。もちろん、ある対象が何であるのかを同定していく実践においては「無秩序」と言ってもよいような、渾沌とした対象把握の状況が存在するであろう。しかし、この「無秩序」と「他所者」が単に実践を理解し損なっていることを並べて等価にするのは間違っている。他所者の利点は、その者が「場の実践者」というカテゴリーも「他所者」というカテゴリーも担えるようになって始めて生まれるものだろう。最終的に彼らは、自分たちの理解が実践者たちと何ら異なるものでなくなったことを述べるが [ibid.:256-7]、これは「他所者」の認識上の利点によるわけではない。
- (6) 『実験室生活』とは異なり、リンチの実験室研究である『アート&アーティファクト』には実験活動が詳細に記述されている。これに関しては [中村 2000] にて検討した。
- (7) こうした傾向にもかかわらず、注意深い読解と好意的な態度を持つのなら、『実験室生活』が反实在論を打ち出しているという解釈を採用する必然性はない。ハッキングじしん、ある種の実在論的観点から『実験室生活』を捉え直すべきであるという議論を展開している。ラトゥール&ウルガーは、科学者の発見した対象が「発見を待ちわびていた『自然の事実』」であるとみなすことを拒否している。ハッキングはこの拒否を、実験科学における「現象の創造」[Hacking 1983:chap.13] という視点と結びつけることで、彼らの主張する「科学的事実の構成」が反实在論的なものにならないことを示している。また、現象を創造していく装置の解明に関わる彼らの主張を評価し、自らその点を補う経験的検討も加えている。
- (8) ガーフィンケルらが掲載している 'Observation 19' [Garfinkel, et al. 1981:150-3] のトランスクリプトを参照。
- (9) 「発見」とされていた事柄が後に否定されるのも、それ自体また一つの実践的達成である。その場合に社会学者がなすべきことは、発見の同定に関する研究と何ら異なるものではない。つまり、『発見』とされていた事柄が後に否定される」という実践活動がいかに織り込まれているのか、このことこそ社会学者が例証・解明できることなのである。また、発見の誤認が確定したことによって実験室での活動が無視されるわけでは全くない。むしろ、その逆であろう。たとえ理論的前提の変革によって発見が破棄された場合でも、そのことは実験室における個々の活動との関係性をもたねばならない。もちろん、理論と観測の関係は――意的に表現するのは困難にしても――単に個々別々に考えることができないのだが、観測されたデータを「理由なく」無視することも不可能である。ならば、コリンズとは逆に、「科学的ワークの場面においても、『場面外の知識』ですら、その場面特有に用いられる」という主張の方が――そのことによって科学活動は実験室でしか行われえないということが含意されることなく――一的をえたものとなるだろう。
- (10) インタビューという手法によってであるが、こうした實在論的志向と懐疑的態度という点を発展させたのが、マルケイ&ギルバートの「経験主義的レポトリ」と「偶然的レポトリ」による誤謬説明との対比である。彼らの問いの立て方にはガーフィンケルの影響がみてとれる [Mulkay & Gilbert 1984=1990:30]。
- (11) ただし、ガーフィンケルたちは、当の天文学者へのインタビューも行っているし、その発見の報告も論文に掲載している。これらを実験実践の理解可能性の「助力」として考えることができる。助力だとみなすのは、一方の天文学者が懐疑的な態度をとっていることなどがそうした助力なしでも理解可能だからである。

- (12) ただし本稿では「全体性としての『社会』」への態度を明示的には表明していない。知識の実践学は、こうした「社会」をカテゴリー的／実践的達成とみなした上で経験的研究を展開する。[中村 1995] 参照。

参考文献

- Ashmore, Malcom 1988 *The Reflexive Thesis*. The Univ. of Chicago Press.
- Barnes, Barry 1981 "On the 'hows' and 'whys' of cultural change," *Social Studies of Science* (11):481-98.
- Bloor, David 1973 "Wittgenstein and Mannheim on the sociology of mathematics," *Studies in History and Philosophy of Science* (4):173-191
- 1976 *Knowledge and Social Imagery*. Routledge. 佐々木他(訳)『数学の社会学』 培風館 1985.
- 1983 *Wittgenstein: A Social Theory of Knowledge*. Macmillan. 戸田山(訳)『ウィトゲンシュタイン：知識の社会理論』 勁草書房 1988.
- Collins, Harry 1974 "The TEA set: tacit knowledge and scientific networks," *Science Studies*(4):165-85.
- 1983 "An empirical relativist programme in the sociology of scientific knowledge,"
- Knorr-Cetina & Mulkay (eds.), pp.85-113.
- 1985 *Changing Order*. Sage. → Univ. of Chicago Press.
- & Pinch, Trevor 1978 "The construction of the paranormal: nothing unsentific happening," Wallis, Roy(ed.), *Rejected Knowledge*. Univ. of Keele 高田他(訳)『排除される知』 青土社 1978.
- Garfinkel, Harold 1967 *Studies in ethnomethodology*. Prentice-Hall.
- Garfinkel, et al. 1981 "The work of discovering science construed with materials from optically discovered pulsar," *Philosophy of the Social Sciences* (17):131-58.
- Hacking, Ian 1983 *Representing and Intervening*. Cambridge Univ. Press. 渡辺 (訳)『表現と介入』 産業図書 1986.
- 1988 "The participant irrealist at large in the laboratory," *British Journal of Philosophy of Science* (39): 277-294.
- 1999 *The Social Construction of What?* Harvard Univ. Press.
- 金森修 2000 「社会構成主義の興隆と停滞」 in 『サイエンス・ウォーズ』 東京大学出版会
- Knorr-Cetina, Karin & Mulkay, Michael(eds) 1983 *Science Observed*. Sage.
- Lakatos, Imre 1978 *The Methodology of Scientific Research Programmes*. Cambridge. 村上他(訳)『方法の擁護』 新曜社 1986.
- Latour, Bruno 1987 *Science in Action*. Harvard Univ. Press. 川崎・高田(訳)『科学が作られている時』 産業図書 1999.
- & Woolgar, Steve 1979 [→1986] *Laboratory Life*. Princeton Univ. Press.
- Lynch, Michael 1979→1985 *Art & Artifact in Laboratory Science*. Ph.D → Routledge & Kegan Paul.
- 1982 "Technical work and critical inquiry," *Social Studies of Science* (12):499-533.
- 1992 "Extending Wittgenstein: The pivotal move from epistemology to the Sociology of Science," Pickering, Andrew(ed.), *Science as Practice and Culture*. Univ. of Chicago Press.
- 1993 *Scientific Practice and Ordinary Action*. Cambridge Univ. Press.
- 2000 "Against reflexivity as an academic virtue and source of privileged knowledge," *Theory, Culture & Society* (17-3):26-54.
- Mannheim, Karl 1929 "Ideologie und Utopie" 樺(訳)「知識社会学」(マンハイム全集第2巻集録) 1975、樺(訳)『イデオロギーとユートピア』(マンハイム全集第4巻) 潮出版社 1976.
- Merton, Robert K. 1978 "The sociology of science: an episodic memoir," Merton & Gaston, J.(eds), *The Sociology of Science in Europe*. Illinois University Press., pp.3-14.
- Mulkay, Michael 1979 *Science and the Sociology of Knowledge*. George Allen & Unwin. 堀他(訳)『科学と知識社会学』 紀伊國屋書店 1985.

- & Gilbert, Nigel 1984 *Opening Pandora's Box*. Cambridge Univ. Press 岩坪他(訳)『科学理論の現象学』紀伊国屋書店 1990.
- 中村和生 1996 「理論化作業の実践学的探究」『年報社会学論集』（関東社会学会）10：181-192.
- 2000 「テクノサイエンスとエスノメソドロジーの接点：インスクリプション」『現代社会理論研究』10：267-280.
- 奥田栄 1993 「科学社会学における相対的構成主義への批判」『年報 科学・技術・社会』2：95-114.
- 澤井 敦 1995 「相対主義とリフレキシヴィティ」『社会学史研究』17：37-53.
- Sharrock, Wes & Button, Graham 2000 “Do the right thing! Rule Finitism, Rule Scepticism and Rule following” 池谷(訳)「正しいことをなさい！」『文化と社会』2：99-123.
- 内田隆三 2000 「社会学の思考と全体性の問題」第73回日本社会学会（於広島国際大学）シンポジウム1：理論系譜の横断 — 19世紀/20世紀社会学報告要旨 pp.381-2.
- Woolgar, Steve 1976 “Writing an intellectual history of scientific development: the use of discovery accounts,” *Social Studies of Science* (6):395-422.
- 1981a “Interests and explanation in the social studies of science,” *Social Studies of Science* (11):365-394.
- 1981b “Critique and criticism,” *Social Studies of Science* (11):504-14.
- 1983 “Irony in the social studies of science,” Knorr-Cetina & Mulkey (eds), pp.239-66.
- 1988a “Reflexivity is the ethnographer of the text,” Woolgar(ed.) *Knowledge and Reflexivity*. Sage., pp.14-36.
- 1988b *Science: the very idea*. Ellis Holiwood Limited.

(明治学院大学他非常勤講師)